

「伝え合う力」とは何か

筑波大学附属駒場中学校・高等学校 国語科
石川祐爾・鹽谷 健・鈴木信好
須藤 敬・関口隆一・平田知之
福田 孝

「伝え合う力」とは何か

筑波大学附属駒場中学校・高等学校 国語科
石川祐爾・鹽谷 健・鈴木信好
須藤 敬・関口隆一・平田知之
福田 孝

本校国語科では、新学習指導要領の実施をふまえて、平成15年度より、『伝え合う力』とは何か』をテーマとして、指導法の検討・実践等を行っている。

この研究では、教材の取り扱い方を様々な角度からとらえ直し、学習指導要領改訂の大きなポイントでもある「伝え合う力」という観点をどのような形で授業実践に結び付けることができるかを検討することを目的としており、従来の教材やその取り扱いについての再検討や、新しいスタイルの授業実践を試行することなどを行っている。今回は、実践の途中経過を示すものとして、平成15年度の教育研究会で、テーマに即して行われた公開授業について報告する。

キーワード：伝え合う力・詩・俳句

1. はじめに

新学習指導要領の実施に伴うカリキュラムの再編によって、必要となった教材の見直しと精選に関して、本校では3年間の研究・実践を行い、本論集で発表してきた。

その学習指導要領の中でも、「伝え合う力」はその方向性を示すキーワードとして広く知られており、指導要領の精神を実践に生かすために必要とされる、教材の取り扱い方・指導法についての見直しを今回は研究テーマに掲げ、検討・実践を行うこととした。

その一部は、毎年行われている本校の教育研究会の公開授業という形で披露し、外部からの参加者による意見や助言講師からの指導を受けて、検討の参考にしている。

今回は、このテーマでの第1年次の報告に当たり、計画の実施途中であるところから、教育研究会で行われた公開授業についてまとめたものを掲載するものである。

各授業の章・授業者・教材名・対象学年は次の通りである。

2. 関口隆一・詩の鑑賞・中学2年

3. 石川祐爾・俳句を読む・高校1年

なお、3の実践に関する、アンケート分析を含む資料を文末に掲げた。

2. 詩の鑑賞 の授業実践

[日時] 2003年11月28日(金) 第1校時
[授業者] 関口 隆一
[授業クラス] 中学校2年B組 男子四十名
[研究テーマ] 「伝え合う力」とは何か
[教材] 木坂 涼 「魚と空」(本文は学校図書
中学校国語2)ほか

[目標]

- 一 詩作品を表現に即して読み取り、鑑賞する。
- 二 韻文(詩)の言葉を、散文の言葉と比較しつつその特徴を捉え、ジャンルの違いについて考察する。

[教材設定の理由]

指導要領では、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高める」(『中学校学習指導要領』第2章 各教科 第1節 国語 第1 目標 より)とある。そこで生徒が身

What is "Tsutae-au chikara"?

- how to encourage aural interaction in the classroom -

に付け、使用することが求められている表現手段としての言葉は、いわゆる詩的言語ではないように思われる。先の引用の続きには、「思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし」とあるので、詩など、散文以外のジャンルの文章を学ぶことが生かされることももちろん想定されていると読めるが、説明的な文章を学び、そこで得たものをを実際の表現方法として役立てる、というような活動を一方に置いて考えると、散文以外のジャンルの文章を学ぶことが直接「伝え合う力を高める」ことにつながるようには思いにくい。

こう述べたところで国語の授業で全く詩を扱わないということはないし、また生徒の生活の中にも詩や詩的言語は知らない間に忍び込んでいる。しかし生徒の反応は大きく分かれている。詩を読むのが好き、あるいは得意だと思っている生徒は大変少ないようであり、一方、仲間内でしか通じないと思っている心情を託したしゃれた言い回しや若者向きの様々な音楽にのった歌詞を楽しむことは少なくない。

今回は、「なぜ詩を学ぶのか？」という素朴な出発点から、詩が散文とは違うところは何なのか、詩でなければ表現できないものがあるなら、なぜ皆が詩人にならないのか、といったことを生徒の実感に即して考えさせ、詩の表現、詩的言語の持つ特徴を学ぶ糸口を与えたいと考えている。

〔授業展開〕 全6時間

- 第一時 導入。「魚と空」を読み、散文で書き直す作業。
- 第二時 前回の作業から見えたことについての確認と詩の読解。
- 第三時 前回の読解の確認とグループごとの作業の開始の指示。
- 第四時 グループごとの作業（続き）。
- 第五時 （本時）グループごとの発表と質疑。
- 第六時 発表に対する補足とまとめ。

〔本時の計画〕

〔目標〕

- 一 グループ学習の成果を、口頭で分かりやすく伝える。
- 二 詩の表現の特徴について、理解を深める。

〔学習指導過程〕（概略）

- ・各グループごとに、詩に関する発表を行う。
- ・発表された内容を正しく聞き取って、内容を理解する。

〔指導準備〕

配布プリント

・評価用紙

発表内容のメモ・感想や印象・内容や発表の仕方についての評価を、各発表毎に記録するためのもの

・各グループで用意した発表のための資料

なお、各グループが選んだ詩は次の通り。

1班	「竹」	萩原 朔太郎
2班	「散る日」	金井 直
3班	「木」	田村 隆一
4班	「道程」	高村 光太郎
5班	「山頂から」	小野 十三郎
6班	「天使」	田村 隆一
7班	「駅」	高田 敏子

〔参考文献〕

- ・中学校二年国語教科書（学校図書）
- ・「中学校国語1～3 巻頭詩の解釈と取り扱いについて」（学校図書）
- ・『カラー版 国語の資料』 監修 宮越賢／編集 石井正己 正進社
- ・『現代詩文庫 49 菅原克己詩集』 菅原克己 思潮社 一九七二年
- ・『中学校でよみたい詩 12 か月』 水内喜久雄／木坂涼編著 民衆社 一九九六年 他

（今回の試みについての検討）

研究テーマは、新学習指導要領の実施を受けて、「伝え合う力」をどのように授業の中に取り入れていくか、あるいは「伝え合う力」を伸ばすためにはどのような授業を行っていくべきかを考えるために設定された。

一方で、教材設定の理由で述べたように、日本語表現の中で、散文と並ぶ韻文（厳密には日本語での「詩」は、「韻」と直接に結び付けにくいことの方がむしろ多いのだが、ここでは「散文」の語と対比させるため、敢えて用いた）については、このテーマとは一見結びつきにくいように思われた。そこで、今回の公開授業では、二つの面からテーマとの関連を考えていくことにした。一つは、詩作品との出会い、読解といった、詩を読み取る作業そのものの中にあるはずの「伝え合う」要素、もう一つは、そうして読み取った読解を口頭発表の形で他の生徒に「伝え」、聞き手がそれに反応し

ていく中での「伝え合い」である。

実践の結果についてだが、一つ目の、生徒自身による詩の読解そのものについては、教師は読解についてあくまで方向付けを生徒に対して行わない形で作業を進めさせたため、グループでの活動がプラスに働いて、メンバー同士の読みをお互いに披露し合うことによって、より深い読解へとグループとして進んでいくところがあった反面、一部の生徒の個人的な読みに他が引きずられるにとどまったところもあった。別の観点から見ると、グループでの話し合いの形ができていたかどうかと、結果としてそのグループが深い読解にたどり着くこととは、必ずしも結びついてはいない。要するに、一人ないし少数の鋭い読み手がいることで結果が出てしまう、ということはある。但し、評価の問題としては、その「深い」読みを教師が単純に良しとするならば、これは一種の「正解主義」になってしまうし、グループでの議論も過程を飾るだけのものになってしまうことに注意が必要であろう。

二つ目の発表形式での授業では、授業後の議論の中でご指摘を頂いたように、発表を聞く側の反応が、なかなかうまく引き出されていなかった。これにはいくつかの原因が考えられる。一つは、物理的な意味での時間が切迫していたことで、限られた時間内に発表を収めようとする意識が強かったことである。また、プレゼンテーションのために有効な「仕掛け」について、発表者側に意識が充分でなかったこともあろう。適切なまとめ方や、聞き手の反応を引き出すための質問をどのように用意するかなど、ここでの工夫については改良の余地はまだまだあると思われる。

しかし、やはり大きいポイントは、今回の発表が詩の読解、解釈にかかわるものだという点ではないかと考えている。従って、先に挙げた一つ目の面とのつながりということにもなる。日常生活などに関わる様々な情報を媒介する手段としての言語であれば、その「伝え合い」は相手によらず短時間で行われるに越したことはないだろう。一方で、今回のような発表を聴いて、たとえそこで取り上げられた作品をあらかじめ読んでおり、自分なりに読解を行っていたとしても、自分とは異なる読みを伝えてくる相手に対してすぐに反応できることは、悪くないとしても必ず必要な条件とはならないのではないかと。

もちろん、良い聞き手となるために必要な学びはあり、今回の授業実践の中でもそこには余り手

が回っていなかったことは確かなので、その点が今後の検討事項であることは間違いない。ただ、一般的な生活の中における「効率」とは尺度の違う「伝え合い」のあり方が、詩的表現をめぐる言語活動を考えていく際に重要であることは、今回のささやかな実践からも感じられた。

3. 俳句を読む の授業実践

〔日時〕平成15年11月28日（金）第2校時

〔授業クラス〕高校一年一組

〔教材〕左記「指導計画」中の三句と、別紙（資料1「俳句を読む」参照）の俳句41句

〔研究テーマ〕 伝え合う力

「伝え合う力」とは「解説」によると「人と人との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら言葉によって適切に表現したり的確に理解したりして、相互の伝達や理解を進めていく能力」とある。このことと「心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語に対する関心を深め」とをふまえてこのテーマを設定した。

本單元では、俳句の鑑賞と一人一句ずつの研究発表、さらにその生徒一人一人による評価という活動をとおして「伝え合う力」の育成を試みる。

さて、俳句の鑑賞と、「伝え合う力」とはどのように関連づけられるだろうか。

まず「伝える」ためには「伝えるもの」（対象）が必要だろう。ここではそれを俳句の内容とした。つまり自分の担当した俳句の内容をより効果的に（聞いている級友によく伝わり、よく理解できるように）伝えるような工夫を求めた。たとえば、

流れゆく大根の葉の早さかな 虚子

この句で求められる「的確な理解」とは、どんなものだろうか。それは、「大根の緑の葉のクローズアップ・澄んだ流れの速さ・冷たさ・上流の大根を洗う作業・作者の心情」といった、句には直接提示されていない、けれどもそうであるにちがいない「世界」の想像力による構築とってよいだろう。そうした作業をとおして「心情の豊かさ」「言語感覚を磨く」ことが可能になるのだろう。

けれど、この「世界」は俳句の解説書にはすでに説明済みで、生徒がそれを写してきて読み上げるだけの発表では「伝え合う力」とは無縁だ。そこで今回は発表者に、それを聞く級友が理解しやすくなるようなある種の「工夫」をすることを要求した。たとえば、先の句なら「ここに書かれていないことで、どんなことが想像できますか」と

いう問いかけ。そうした「問いかけ」を通して発表者と級友とのやりとりを行わせ、その過程で明らかになってくるものに期待したい。思いがけない発見が、俳句への興味、関心を促すことも期待したい。

もちろん、この「問いかけ」を考え出すためには「的確な理解」を前提としているが、さらにその重点化や級友の反応の想定も必要だろう。こうした思考の過程を経ることで発表者をして「よりの的確な理解」「一歩踏み込んだ理解」に向かわせることができるのではないか。これが研究の仮説である。

これはまるで教師が授業の準備段階で考える発問そのものだが、教師の発問を聞いてから考えるいつもの授業とは違って、それを自分で考え出す作業を課したということである。

各人の研究発表の評価は、教師によるものとは別に毎時間、評価表（別紙を配付）に、次の3項目を5段階（5～1）で記入させている。

- ・内容の理解度
- ・伝える「工夫」
- ・発表全体の印象

一学級 41 人なので、ひとりの発表に当人をのぞいた 40 人分の「評価点」が出る。それを合計することで一応の順位づけをしてみたい。

なお、発表が完了した生徒には、別紙の「研究発表要旨」（資料2参照）を参考にして「まとめ」を提出させ、それを印刷して全員に配っている。

〔指導計画〕全 12 時間

第 1 時 俳句と川柳の違い、「流れゆく大根の葉の早さかな」の鑑賞

第 2 時 「冬の水一枝の影も欺かず」の鑑賞
「一枝」の読み方を句全体の意味内容から決定、「影」の正しい意味、研究発表のポイントの説明

第 3 時 「小春日や石を噛みみる赤蜻蛉」の鑑賞
「小春日」の正しい意味、「石を噛みみる」の状況の把握、作者との共通点

——ここまですを9月中旬に実施。その後から11月上旬までを発表の準備期間とした。

第 4 時～第 11 時
生徒の研究発表（本時はこの間のどれかにあたる）

第 12 時 評価の集計と結果の発表・感想と反省
〔本時の展開〕新規の研究発表（5名程度）と教

師の質問

本時の指導

- ・目標 発表者 : 調べたこと、自分の考えをわかりやすく伝える。
(発表後に生徒や教師の質問を受けて)句の理解を深める。
- 他の生徒 : 句の内容を的確に理解する。
(発表の評価をする)

・展開

俳句(発表者) *指導の要点

雉子の眸のかうかうとして売られけり(種本)

*「雉子」の生死、「かうかうとして」の意味、全体の情調

鮫鱈の骨まで凍ててぶちきらる(竹村)

*「ぶちきらる」の語感、全体の情調

蔓踏んで一山の露動きけり(妹尾)

*因果関係の確認、「動きけり」の意味、感動の中心

うしろすがたのしぐれてゆくか(末永)

*「しぐれ」「か」の意味、「自嘲」を知る

夕立やお地藏さんもわたしもずぶぬれ(嶋田)

*「ずぶぬれ」の語感、全体の情調

たましひのたとへば秋のほたるかな(佐藤)

*「たましひ」、「秋のほたる」の語感、句の背景

・ここまでの授業の印象

このクラスは、すでに4時間で18人が発表を終えた。一回で「合格」を得た者6人、指導者の質問に十分に答えられずに「調べ直し」の者8人、欠席4人になっている。

図書館に行って解説書を読むというより、手近のインターネットで調べている者が多いので、珍妙な解釈を堂々と述べることもあり、意外性?に富んだ時間になっている。

「伝える工夫」は、しっかり準備している者といいい加減な者と、半々くらいだ。

また唐突な質問になってしまっているものが多く、いろいろな答えを期待しても出てこないのが現状だ。

発表そのものについては、教壇に立って、かなりの緊張感にさらされる反面、それなりの評価を

得たときの充足感、満足感はあるようだ。

ただ、予想はしていたが、ものの名を知らない、生活の実感に欠ける実態を毎時間痛感させられている。

別のクラスで「きみ嫁けり遠き一つの計に似たり」の発表で（このクラスは最後から始めた）「嫁けり」を「よめけり」と読んだ。そして「この、きみって誰だと思えますか」と質問した。すると「妹、母、姉、いとこ」などの答えが返ってきた。前途の多難を確信した。ようやくのことで、「心を寄せていた女性が自分以外の男性と結婚してしまった。なのでそのひとが死んでしまった知らせのように哀しい」という解釈に至った。けれど、この句には「遠き一つの」とあるので、これとは別の「哀しみ」があるはず。それを次回までに考えて来るように言っている。はたしてどうなることか。

「伝える工夫」の考察

公開授業資料の指導案でも触れたが、生徒にとって本研究テーマでいう「伝え合う力」のようなものは、日常の授業（発言）では、ほとんど意識されることはないといえる。

そこでそうであるからこそ今回は、自分の調べた俳句を、それを聞いている級友に理解してもらおうという明確な目的を示して、質問のかたちの「問いかけ」を考えさせてみた。

結果的には（アンケート 一資料3～5参照一）からもこの工夫は、あまり効果的には働かなかったといえる。それは残念なことだったが、失敗を見つめて少しでも今後活かせるよう考察を加えたい。

まず、「問いかけ」の種類（パターン）はほぼ4つに分けられた。

- ①内容に直結するもの
- ②表記に関するもの
- ③語のイメージを問うもの
- ④語の読み方を問うもの

①の例として、「曳かれる牛が..」で「この牛はどこへ曳かれてゆくのだと思えますか」、「雉子の眸の..」で「この雉子は生きているか、死んでいるか」、「三月の甘納豆の..」で「この『甘納豆』さんは、男性か女性か」などがある。当然のことだが、こうした問いに即答することは難しい。そのため質問に対する返答が得られぬまま、質問者自身が答えざるを得なくなった。目的の伝え合いは成立せず、こちらのねらいも生きていない。こ

の種の質問は、ある意味では安直に思いつきやすいものだ。一方、内容に直結するから答えは出にくい。そしてこのパターンが一番多かった。低迷は必然だった。

②の例として、「鮫鱈の骨まで..」で「『鮫鱈』という漢字はどんな感じがしますか」、「をりとりてはらりと..」で「ひらがなばかりなのは？」などがある。これは①にくらべて答えやすい。質問者も答えが出れば張り合いも出てくる。どの句にもあてはまるというわけにはいかないが、このパターンは、なかなか有効—との学習はできた。（しかし、「をりとりて..」の場合、内容が理解されていないと、この質問に的確に答えることは難しい。）

③の例は、「董程な小さき人に..」で「すみれってどんなイメージですか」、「万緑の中や..」で「『万緑』と『新緑』のイメージの違いは？」など。これはイメージを答えればいいので、とりあえず雑多な、あるいはいい加減な返答があつてそれなりに盛り上がるものの、決め手に欠けるので双方の手応えはイマイチ。しかし、句への導入という観点からは使える場合もあるだろう。

④の例は、「春風や鬨志いだきて..」で「『春風』はなんと読みますか」、「蔓踏んで一山の露..」で「『一山』の読み方は？」など。これは、授業者が事前にサンプルとして示したものと同一パターン。考案する生徒にとっては楽なものだったろうが、ここから句のポイントに迫るのにはなかなかの腕力（理解力）を要する。ただ、訓読みと音読みの響きの違いの確認と、内容との合致に気づくという勉強はできたと思う。ところで、この「問いかけ」を考えさせるにあたって、さしたる指導はしなかった。ひとりひとりしらべる句が異なれば、「問いかけ」の性質も違って当然。生徒は戸惑ったらしいがだからこそ一応4つのパターンが生まれたとも言えよう。次年度にもこのかたちの授業が可能ならば、ここで得られたパターンを事前に生徒に示すことができる。初年度の生徒よりは少しは考えやすくなるだろう。そして、ほんのわずかではあるがそれは本研究の成果・収穫といえるだろう。

資料 1

俳句を読む

① いくたびも雪の深さを尋ねけり 正岡子規

② 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

③ 鶏頭の十四本もありぬべし

④ 時鳥廁半ばに出かねたり 夏目漱石

⑤ 釣り鐘のうなるばかりに野分かな

⑥ 白牡丹といふといへども紅ほのか 高浜虚子

⑦ 春風や鬨志いだきて丘に立つ

⑧ 流れ行く大根の葉の早さかな

曳かれる牛が辻でずっと見回した秋空だ河東碧梧桐

⑩ 赤い椿白い椿と落ちにけり

⑪ 早苗投ぐ青の塊飛んでゆく 山口誓子

⑫ 夏草に汽缶車の車輪来て止まる

⑬ 夏の河赤き鉄鎖のはし浸る

⑭ 芋の露連山影を正しうす 飯田蛇笏

⑮ くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

⑯ をりとりてはらりとおもきすすきかな

⑰ たましひのたとへば秋のほたるかな

⑱ 夕立やお地藏さんもわたしもずぶぬれ
種田山頭火

⑲ うしろすがたのしぐれてゆくか

⑳ 蔓踏んで一山の露動きけり 原 石鼎

鯨鱈の骨まで凍ててぶちきらる 加藤楸邨

雉子の眸のかうかうとして売られけり

生きかはり死にかはりして打つ田かな
村上鬼城

降る雪や明治は遠くなりけり 中村草田男

万緑の中や吾子の齒生え初むる

冬菊のまとふはおのがひかりのみ水原秋桜子

こんなよい月を一人で見て寝る 尾崎放哉

せきをしてもひとり

方丈の大庇より春の蝶 高野素十

ひっぱれる糸まっすぐや甲虫

バスを待ち大路の春をうたがはず 石田波郷

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや中村汀女

花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ 杉田久女

まさおなる空よりしだれざくらかな 富安風生

葡萄垂れ下がる如くに教へたし 平畑静塔

いちまいの皮の包める熟柿かな 野見山朱鳥

まなうらに今の花火がしたたれり 草間時彦

白桃の水をはじきて水に浮く 鷹羽狩行

きみ嫁けり遠き一つの訃に似たり 高柳重信

時計屋の時計春の夜どれがほんと久保田万太郎

女教師の男言葉や夏は来ぬ 上島清子

資料 2

研究発表要旨（例）

一年 組 氏名

一 俳句

冬の水一枝の影も欺かず 中村草田男

二 読み方

「冬のみず」と「いっしのかげも」の間に間を置く。

三 口語訳

冬の池の水は、一枝の影すら逃さずに映している。

四 解釈

池か湖の水面に、そばの裸木の枝が映っている。その水面は、木の細い枝の一本も逃さずに、正確に完璧に映している。大気もぴーンと張りつめた、いかにも冬らしい寒さ、厳しさが感じられる。

五 伝える工夫

・「一枝」は、どう読みますか。

・予想される答え

「ひとえ」「ひとえだ」「いっし」など

・「いっし」がふさわしい理由

冬の木々の枝の、先の尖った鋭角的な姿、水の冷たさ、清澄さから、促音の「イッシ」という音が合っているから。

六 感想

「欺かず」と強く否定形の擬人法にしたのは、冬の水に意志を感じたということだろうか。作者の自然を観る眼、あるいは人生観のある種の「厳しさ」の反映だろうか。

水や鏡に映ったものを「影」というとは知らなかった。

※ 生徒の発表後の提出用サンプルとして配布したもの

資料3

「俳句を読む」授業についてのアンケート

(1) 準備で

- 1 学校の図書室に行った
- 2 家の近くの図書館に行った
- 3 インターネットを見た
- 4 国語便覧を見た
- 5 ほとんど自分で考えた
- 6 その他

()

(2) 準備で役立ったのは

- 1 学校の図書室の本
- 2 地元の図書館の本
- 3 インターネットの情報
- 4 国語便覧
- 5 友人や家の人の話
- 6 その他

()

(3) 自分の発表で

- 1 かなり緊張した
- 2 ふつう
- 3 その他

()

(4) 「伝える工夫」について

- 1 うまくできたと思う
- 2 質問を考えるのが難しかった
- 3 目的（ねらい）がよくつかめなかった
- 4 その他

()

(5) 「評価表」について

- 1 観点が示されていて評価しやすかった
- 2 観点が漠然としていてポイントを絞りにくかった
- 3 印象による評価で、信頼性が少ないと思う
- 4 その他

()

(6) 「発表要旨」の配布について

- 1 印刷して配ったのはよかった
- 2 読みにくいものもあった

3 もっと詳しく書きたかった

4 あまり役立たなかった

(7) 友達の発表を聴いて（全体的に）

- 1 よくわかった
- 2 ふつう
- 3 わかりにくいものがあった
- 4 個人差が大きかった

(8) 教師の質問について

- 1 スムーズにクリアできた（自分の発表のとき）
- 2 質問のポイントがつかみにくかった
- 3 答えを調べる方法がわからなくて困った
- 4 質問によって俳句の理解が深まった
- 5 どんな質問をされるか不安だった

(9) 生徒に調査・発表させることについて

- 1 先生の説明を聞くより親近感があり緊張感もあってよい
- 2 自分で調べるのでその俳句をよく考え、印象が深くなる
- 3 一句一句の完璧な解釈ができていないのではないかと不安だ
- 4 事前に調べ方をもっと指導すべきだ
- 5 準備に時間がかかり、面倒で教育的な効果もほとんどないと思う

(10) 発表を終えて

- 1 俳句に対して、調べる前より興味・関心を持った
- 2 みんなに聴いてもらったり説明することの難しさを感じた
- 3 俳句の内容の解釈が難しかった
- 4 みんなの聞く態度が悪くて発表しにくかった
- 5 あまり勉強にならなかった

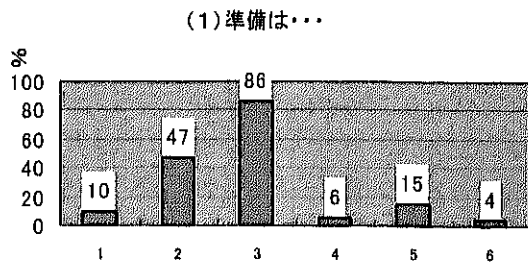
(11) これからこのような授業は（生徒が調べて発表する形式）

- 1 他の教材でももっとやった方がよい
- 2 調べやすい教材でやった方がよい
- 3 やめた方がいい

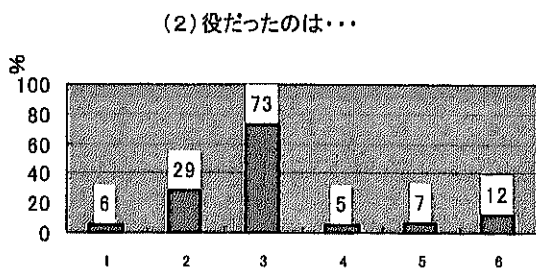
(12) その他の感想

資料4

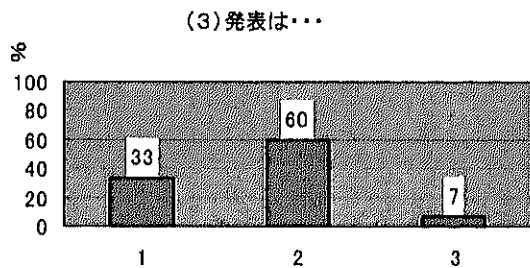
アンケート結果



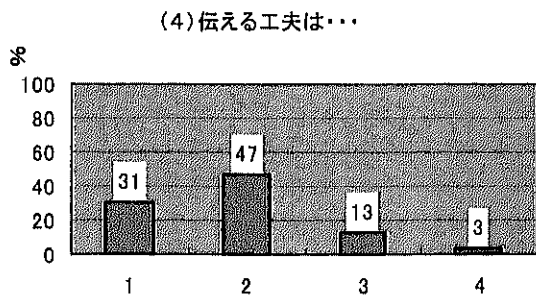
- 1 : 学校の図書室
- 2 : 家の近くの図書館
- 3 : インターネット
- 4 : 国語便覧
- 5 : 自分で考えた
- 6 : その他



- 1 : 学校の図書館の本
- 2 : 地元の図書館の本
- 3 : インターネット
- 4 : 国語便覧
- 5 : 友人や家の人の話
- 6 : その他

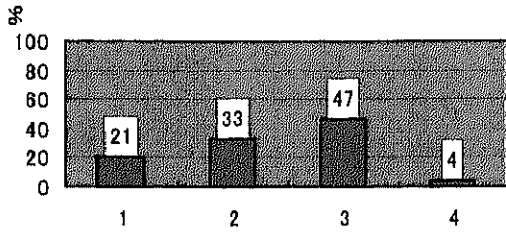


- 1 : かなり緊張
- 2 : ふつう
- 3 : その他



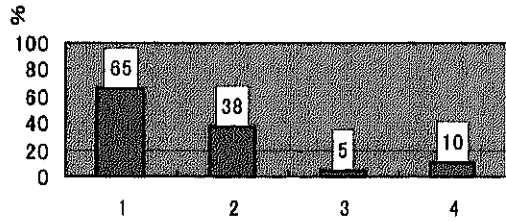
- 1 : うまくいった
- 2 : 難しかった
- 3 : ねらいがつかめなかった
- 4 : その他

(5) <評価表>について...



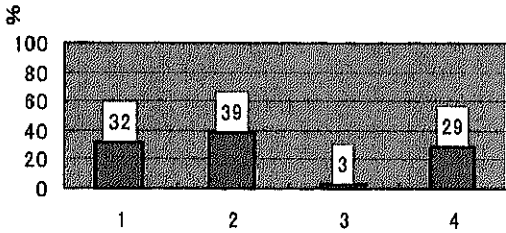
- 1 : 評価しやすい
- 2 : ポイントが絞りにくい
- 3 : 信頼性が少ない
- 4 : その他

(6) <発表要旨>の配布について...



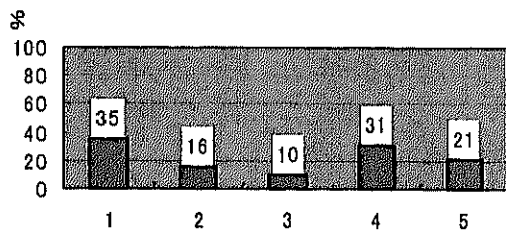
- 1 : 印刷して配ったのはよかった
- 2 : 読みにくいものもあった
- 3 : もっと詳しく書きたかった
- 4 : あまり役立たなかった

(7) 発表を聞いて...



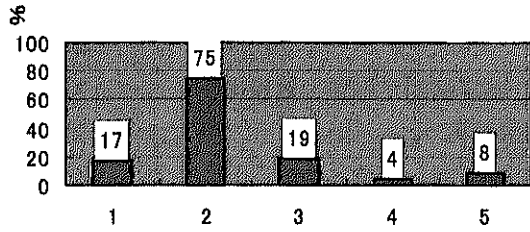
- 1 : よくわかった
- 2 : ふつう
- 3 : わかりにくいものがあった
- 4 : 個人差が大きかった

(8) 教師の質問について...



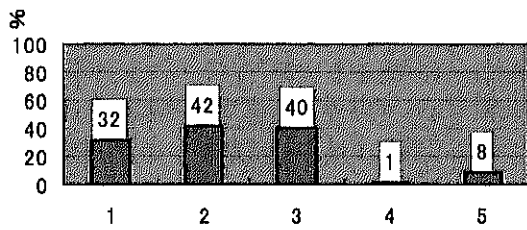
- 1 : スムーズにクリアできた
- 2 : ポイントがつかみにくかった
- 3 : 調べる方法がわからなかった
- 4 : 質問によって理解が深まった
- 5 : 何を質問されるか不安だった

(9)生徒に調査・発表させることについて・・・



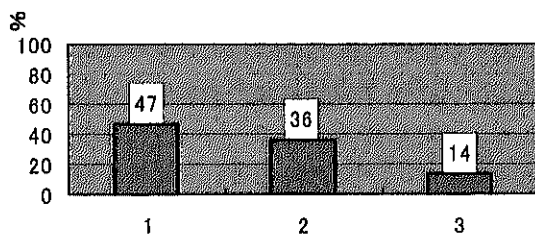
- 1 : 親近感・緊張感があつてよい
- 2 : よく考え、印象が深くなる
- 3 : 解釈が不完全になりがちだ
- 4 : 調べ方を指導すべきだ
- 5 : 時間がかかり効果もない

(10)発表を終えて・・・



- 1 : 俳句に興味・関心を持った
- 2 : 説明することの難しさを感じた
- 3 : 解釈が難しかった
- 4 : 聞く態度が悪く発表しにくかった
- 5 : あまり勉強にならなかった

(11)これからこのような授業は・・・



- 1 : 他の教材でもやった方がよい
- 2 : 調べやすいものでやった方がよい
- 3 : やめた方がよい

アンケートの考察

(1)の「準備は・・・」では、予想通り「インターネット使用」が圧倒的だった。解説書とくらべると深みがないように思われるが、現状を見れば手近な手段なので当然の結果だろう。

(2)の「役だったものは・・・」で、「インターネットの情報」86%の次に、「地元の図書館」が30%近くあった。これは、「図書館に行かせたい」というこちらの意図がかるうじて通じた程度の数値だろう。一方で、本校の図書室の貧弱さを露呈する結果とはなつた。なお、この項の「その他」には、「自分の頭」が3%、「国語辞典」が2%、「先生のヒント」が2%、「家にあった本」が1%、「書店で見つけた本」1%、「中学のときのノート」1%などの記述があつた。このうち「先生のヒント」とは、適当な参考書がなくて困っている生徒が相談（救済を求めて？）に来たときの、アドバイスを指している。

(3)の「発表は・・・」の「その他」には、「ワクワクした」「快感」などの記述があり、実際、各クラス2・3人はいるお祭り大好き人間はおおはしゃぎだった。その反面、内気、内向的な生徒は、過度のストレスを浴びたことだろう。しかし、それもひとつの経験と言いたいのだが。

(4)の「伝える工夫は・・・」は、「難しかった」が半数。日常生活で、このようなことを意識的に考える「時」も「場」もないだろうから、当然と言える。だからこそ、授業であえて取り上げたわけだが、十分には浸透しなかつたようだ。これもひとつのキッカケになればよいと思う。

(5)の「評価表」とは、各人の発表を聴いている生徒が、①理解度・②伝える工夫・③全体的な印象の3項目を5点満点で評価するもの。2：「観点が漠然としてポイントを絞りにくかつた」と、3：「印象による評価で、信頼性が少ないと思う」を合わせると、80%なのは、評価の妥当性、信頼性がほとんど見られないと言える。これは、項目の立て方が悪かつたのか。ただ発表を聴いているだけでは、緊張感に欠けるので、何かチェック（作業）をさせようとの消極的な（姑息な）ねらいもあつたのだが。再考を要する事柄のひとつだ。

(6)の「発表要旨の配布」は、よかつた。その中の一から六までの項目立ても妥当であつたと思う。80%程度の生徒が、ワープロ打ちのものを提出したが、手書きで、うすい文字のものもあり、それが、「読みにくいものもあつた」の数値となつて出た。ともあれ、結果として、各人、40枚ほどの「発表要旨」が手元に残つた。いつか再読するとき（何かで役立つとき）が来ればよいと思う。

(7)の「発表を聴いた後の感想」では、「よくわかつた」と「ふつう」を合わせると、70%を超えているので、ほぼ成功といえよう。一方で、4：「個人差が大きかつた」が29%いた。発表という活動には、基本的、総合的な能力の差が歴然と現れる。当然の結果だろう。

(8)の「教師の質問」とは、発表を聴いたあとで、その句のポイントを確認したり、不足部分の追加説明を要求する教師の「質問」をいう。これがクリアできないと、「再発表」を言い渡される。そのため生徒はかなり身構え、緊張していた。が、4：「質問によって俳句の理解が深まつた」が31%あつたので、こちらの意図は、そこそこ達成されたといえようか。あるいはこの程度では不十分と言うべきか。

(9)は生徒に調査・発表させることについて問うたもの。1：「先生の説明を聞くより親近感があり、緊張感もあつてよい」と、2：「自分で調べるのでその俳句をよく考え、印象が深くなる」とを合わせると92%あつた。これは、うれしい予想外れだった。（当初、生徒のやる気、意欲をあまり期待していなかつた。）3：「一句一句の完璧な解釈ができていないのではないかと不安だ」が19%あつた。これは、いい加減な発表や、長期欠席者（発表なし）の場合を指していると思われる。この数値は、生徒の実態（やる気のない者もいる）と彼らが求めるもの（理想的な発表）との乖離を考えれば、妥当といえよう。

(10)の「発表を終えて・・・」で、1：「俳句に対して、調べる前より興味・関心が湧いてきた」と、2：「みんなに聴いてもらつたり説明することの難しさを感じた」と、3：「俳句の内容の解釈が難しかった」がほぼ同数だった。まずこんなものなのだろう。

(11)「これからこのような授業は・・・」では、1：「他の教材でもやったほうがよい」と、2：「調べやすいものでやったほうがよい」を合わせると、83%で、好評だった。ところが、3：「やめたほうがよい」は14%で、これをどう読むべきか。後述の(12)の記述に、「準備に時間がかかり、面倒で大変」といった主旨のものが5%あ

り、これは、わざわざこのようにコメントしているところからもかなり強くそう思っていることがわかる。これは単に怠惰からくる不満のあらわれと解釈していいと思うのだが。

(12)その他の感想（記述式）

- ・発表している期間が長すぎて、あきた。(5%)
- ・準備に時間がかかり、面倒で大変。(5%)
- ・楽しかった、面白かった、よかった。(4%)
- ・ほとんど情報のない句はやめてほしい。(4%)
- ・自分で考え、よい勉強になった。俳句について考えるようになった。(3%)
- ・当たっているのにやってない人は迷惑だ。(3%)
- ・クラスによって発表に差がつくように思う。(1%)
- ・発表を評価するのは難しい。(1%)
- ・俳句は、教養やセンスを磨くのいいと思った。(1%)

〜〜以下、1人記述のもの〜〜

- ・よく考えて言った「伝える工夫」だったので、その場で言ってもすぐ理解してもらえなかった。
- ・前に出る発表は、極度に緊張するのでやめてほしい。
- ・先生の質問はさすがだと思った。
- ・先生の助言は役立った。
- ・発表には個人差があるからあとで先生が補足したほうがよい。
- ・もっと言いたいことややりたいことがあったが、全部できなくて残念。
- ・やりやすい俳句が当たってよかった。
- ・発表のやり直しは、やる気がなくなる。
- ・普通に、先生がやっていったほうがよい。
- ・発表はその人のクラスにおける普段からの立場、性格などで聞き手にたいする印象が明らかに変わってしまっているのではないと思う。聞き手も普段から面白い人のときは聞き、他の人の発表はあまり聞いていない。それを解決する方法はないものか、考えたが思いつかないのではないのかもしれない。
- ・俳句の鑑賞には、その句の背景（知りたくもない作者の苦労話など）を知らなければならないものが多いので、俳句は好きになれないと思った。
- ・自分が読んで心に残った本などの発表などもやってみると面白いと思った。